



新国立劇場 2025/2026 シーズンオペラ

新制作

リヒャルト・シュトラウス
エレクトラ

Elektra / Richard Strauss

2026年6月29日(月)～ 7月12日(日)

会場：新国立劇場オペラパレス 2026年4月11日(土) 10:00～ 前売開始

復讐の情念に囚われたエレクトラを待ち受けるものは—20世紀オペラ屈指の名作を大野和士指揮×ヨハネス・エラート演出で新制作

血塗られた家系アトレウス家の娘エレクトラが復讐の情念に燃え、悲願を果たした末に命を落とす凄惨な復讐劇『エレクトラ』を、リヒャルト・シュトラウスがホフマンスタールと組んでオペラ化。オペラ史上最大規模といえる分厚いオーケストラとドラマティックなソプラノに支配された音楽が、悲嘆、憎悪、不安、恐怖、歓喜、恍惚とめまぐるしい感情の奔流を緊迫感の中で伝え、一瞬たりとも隙のない圧倒的体験をもたらします。大野和士指揮、その音楽的感性が絶賛されるヨハネス・エラート演出による新制作で登場します。

新たなエレクトラ歌いアイレ・アツソーニが“歓喜の瞬間”を呼ぶ！

難役エレクトラを歌うのは、フランクフルトなどで立て続けにこの役を歌い、その声楽テクニックと驚異的な心理表現が熱狂的セッションを起こしているアイレ・アツソーニ。情熱的で知的で高貴、「エレクトラの神髄」と評されるアツソーニのエレクトラは、音楽ファン必見です。

エレクトラと対峙する母クリテムネストラには日本が生んだ世界最高峰のメゾソプラノ藤村美穂子、弟オレストには名歌手エギルス・シリンスが出演します。

<資料のご請求、取材のお問い合わせ>

新国立劇場 制作部オペラ 広報担当：高梨木綿子

Tel: 03-5352-5733 / Fax: 03-5352-5709 / E-Mail: takanashi_y1307@nntt.jac.go.jp

魂が抉られる極限の叫び—シュトラウスが彫琢するギリシャ悲劇

父アガメムノンを殺した母への復讐の情念に取り憑かれ、ただその悲願の成就のみを生きるよすがとして過ごすエレクトラ。やがて弟オレストの帰還によって運命の復讐が果たされる——。ソフォクレスのギリシャ悲劇をもとに、リヒャルト・シュトラウスがホフマンスタールと組んで作曲したオペラ『エレクトラ』は、一幕に凝縮された対話でエレクトラの悲願と情念を描き出す、20世紀オペラ屈指の傑作です。

オペラ史上最大規模ともいわれる重厚なオーケストラと、ドラマティックなソプラノに導かれる圧倒的な音楽が、憎悪、恐怖、緊迫、歓喜、そして恍惚へと至るめまぐるしい感情の奔流を鮮烈に描き出します。最初の一言から幕切れまで一瞬たりとも見逃せない、緊迫感漲るオペラ『エレクトラ』にご期待ください。

注目の演出家エラート×大野和士のもと、アッソーニ、藤村、シリンスら精鋭キャスト集結

演出を手掛けるのは、新国立劇場初登場となるヨハネス・エラート。その音楽的感性が絶賛され、ペーザロのロッシーニ・フェスティバル『エルミオーネ』(24年)はイタリアで最も権威あるアッピアーティ賞に輝き、25年にはベルリン州立歌劇場『Fin de Partie(エンドゲーム)』などの成果によりインターナショナル・オペラアワードにノミネートされた、今オペラ界注目の演出家です。フランクフルト歌劇場で大野和士指揮により世界初演された『Der Mieter(借家人)』(17年)でも話題を巻き起こしており、今回再び大野和士とタッグを組むこととなります。リヒャルト・シュトラウスの圧倒的でエネルギー溢れる音楽が導くエレクトラの苛烈な情念と共に、女性3役(エレクトラ、クリテムネストラ、クリソテミス)が三面鏡のように映し続ける不安にも注目するという、エラート演出にご期待ください。



左上より大野和士、J.エラート、藤村実穂子、A.アッソーニ、H.ハウゲルド、工藤和真、E.シリンス、森谷真理

エレクトラは、この役を近年立て続けに歌い、センセーションを巻き起こしているアイレ・アッソーニ。エレクトラと対峙する母クリテムネストラには世界最高峰のメゾソプラノ藤村実穂子、弟オレストにワーグナー歌手として名を馳せるエギルス・シリンス、妹クリソテミスにはヘドヴィグ・ハウゲルドが出演する盤石の顔合わせです。指揮は大野和士芸術監督自らが当たります。

比類なき表現者アイレ・アッソーニ登場！ 新時代のエレクトラ歌いが“歓喜の瞬間”を呼ぶ！



難役エレクトラを歌うのは、ワーグナーやリヒャルト・シュトラウスをレパートリーにドイツを中心に活躍中で、23年夏にはパイロイト音楽祭へもデビューしたドラマティック・ソプラノ、アイレ・アッソーニ。23年3月、「フランクフルト・エレクトラ」とセンセーションを起こしたフランクフルト歌劇場公演(セバスティアン・ヴァイグレ指揮、クラウス・グート演出による新制作公演)をはじめ、近年立て続けに各地でエレクトラを歌って熱狂を呼び、その声楽技巧と圧巻の表現力により、「エレクトラの神髄」(Thüringer Allgemeine 紙)、「至高の舞台女優」(BRクラシック)、「エレクトラのありきたりなイメージは

すべてこの瞬間に消え去る」(Frankfurter Allgemeine 紙)、「アッソーニの大勝利」(ヘッセン放送)と激賞されている逸材です。

今最も注目される“新時代のエレクトラ歌い”アッソーニ登場は、まさに見逃せない、全ての音楽ファン必見の瞬間です。

アイレ・アッソーニ『エレクトラ』関連プレスレビューより

フランクフルト歌劇場『エレクトラ』(2023年3月)

「アイレ・アッソーニの壮大で完璧な声による、心理的に磨き抜かれた一人舞台。[...] このフランクフルト・エレクトラは、まさに真の意味で、とてつもなく素晴らしい。」(南西ドイツ放送 SWR2、ベルント・キュンツィヒ)

「最前線に立つのは、エストニア出身の素晴らしいソプラノ歌手アイレ・アッソーニだ。彼女は、歌唱、演技、そして何よりもその驚異的なコンディションで、深い感銘を与えた。オペラ終盤で彼女が倒れた後、幕が降りるまでの間、観客はしばしの静寂に包まれた。110分間の最高潮の緊張の後、衝撃の静寂が訪れ、そしてまさに嵐のような拍手が巻き起こった。」(ファウスト・クルトゥール、アンドレア・リヒター)

「オレスト登場後のエレクトラのモノローグは溢れんばかりの善意に満ち、アッソーニをこの役柄に完全に同期させる。エレクトラのありきたりなイメージはこの瞬間に消え去る。姿を現すのは怪物ではなく、愛することのできない人間そのものだ。」(フランクフルター・アルゲマイネ紙、ヤン・ブラフマン)

「アッソーニはこの要求の高い難役を、激しい情熱、そして見事なピアノシモと靈感あふれるパッセージで構築した。」(Online Merker、ゲルハルト・ホフマン)

「今回フランクフルト・デビューを果たしたアイレ・アッソーニ以上に、この知的な内面描写にふさわしい歌手は存在し得ない。彼女は力強いソプラノでシュトラウスの巨大なオーケストラを難なく圧倒しただけでなく、この役を不穏できわどい作品として表現した。」(Musik Heute、ベッティナー・ボイエンス/ヴィーラント・アッシンガー)

「そのエネルギッシュで、豊かで、そして非常にドラマティックな歌声は、最初の音から観客を魅了した。アガメムノンのトラウマを抱え、その鋭い視線で同胞を恐怖に陥れる娘を演じ、最大限の存在感で劇場を満たした。アッソーニは、演技と演奏の両面で、役柄の深層心理における狂気を見事に表現するエレクトラを演じた。」(Bachtrack、アレクサンドラ・リヒター)

「アイレ・アッソーニは、主役を非常に効果的に歌い上げ、声、表情、そして情感豊かな演技で魅了した。演出家が要求する困難な技巧を完璧にマスターし、この巨大な役柄を難なくこなし、そして真に輝かしい歌唱の瞬間を幾度も生み出した。[...] 長い間続く熱狂的な喝采が沸き起こり、特にアッソーニへの称賛でピークを迎えた。」(OperaClick、ヴィットリオ・マスケルバ)

エアフルト歌劇場『エレクトラ』(2022年10月)

「アイレ・アッソーニは冒頭から一音一音で主張する！[...] 声量と演技の両面において、まさにエレクトラの神髄と言えるだろう。」(ヨアヒム・ランゲ、テューリンガー・アルゲマイネ・ツァイトUNG)

「センセーショナルなまでに説得力がある[...] 最も激しい爆発的な場面さえ、その歌声の高貴さを決して失わない。」(ロベルト・ベッカー、Freies Wort / inSüdthüringen.de)

「アイレ・アッソーニは、被害者であると同時に加害者でもあるエレクトラを体現する。極めて傷つきやすく、それが彼女を神経質にしている。[...] 彼女のドラマティック・ソプラノは粘り強く、同時に柔らかく繊細な音色を生み出すことができる。それが、美しく個性的な役柄を創り出すことを可能にしている。」(デア・ノイエ・メルカー誌)

ボン歌劇場『エレクトラ』(2019年3月)

「アイレ・アッソーニは実に素晴らしい！極めてドラマティックなパッセージにおいても、彼女の声は力強い歌唱とは裏腹に、柔らかく丸みを帯びている。このエレクトラは単なる狂女ではなく、自らの女性性を全て抑圧した哀れな存在なのだ。オレストとの対話の中で、彼女は自らに課したこの諦念(“私は前は美しかったと思う”)を痛切に自認する。このエレクトラを聴くと、実に心が痛む。」(Online Merker、クリストフ・ツインメルマン)

「女優として、彼女は身体表現、表情、身振りを完璧に使いこなし、この葛藤する女性の感情の揺れ動きを巧みに表現した。歌唱面では、力強い声量とダークで成熟した音色を披露し、エレクトラの多面的で個性的な感情を、卓越したダイナミクスで表現している。まさに驚異的な偉業だ！」(メヒティルト・ティルマン)

「冒頭の壮大なモチーフであるアガメムノンの呼びかけから、オペラの最後を締めくくる壮大なモチーフに至るまで、アイレ・アッソーニはこの役あらゆる瞬間を観客に納得させる力強さを放つ。オペラ史上おそらく類を見ない役柄だ。彼女は恐れを知らない高みから、憎しみと復讐心、そして同時に優しい響きも表現した。」(オペラ・ラウンジ、ジュライ・ポーザー)

アッソーニ関連のレビューは、アッソーニの公式ウェブサイトをご覧ください。<https://www.aileasszonyi.com/>

芸術監督・大野和土からのメッセージ

新制作でお届けするリヒャルト・シュトラウスのオペラ『エレクトラ』は、ギリシャ悲劇をもとにした激しい復讐の物語です。父アガメムノンを母クリテムネストラとその愛人エギストに殺された娘エレクトラが、長年行方不明だった弟オレストの帰還を機に、ついに復讐を果たします。上演時間約1時間45分という凝縮された作品ながら、力強い主題が繰り返されることで音楽のエネルギーが次第に高まり、最後まで聴き手を強烈な緊張感へと引き込みます。美しくも力強い二重唱や、声と身体を振り絞るエレクトラの壮絶な幕切れは、まさに圧巻です。

今回の演出は新国立劇場初登場のヨハネス・エラートが手がけます。ウィーンでオーケストラ奏者として活躍した後に演出家へ転向したという異色の経歴を持ち主。フランクフルトで現代オペラ『Der Mieter(借家人)』世界初



演と一緒に仕事をしましたが、一筋縄ではいかない複雑な箇所をうまく舞台化し、雅やかな舞台を作ってくれました。彼と『エレクトラ』という劇を作り上げていくのは本当に楽しみです。エレクトラにはアイレ・アツソーニ、母クリテムネストラには藤村実穂子、弟オレストにはエギルス・シリンスら実力派が集結。強烈な音楽とドラマがぶつかり合う新制作『エレクトラ』をお楽しみください。

<あらすじ>

父アガメムノンが母クリテムネストラと情夫エギストに殺された。父への思慕と、復讐を成就するであろう弟オレストへの期待を支えに、虐待に耐えながら生きるエレクトラ。妹クリソテミスは姉を必死でなだめるが、エレクトラは聞く耳をもたず、復讐に怯えるクリテムネストラの懇願も拒絶する。偽りの死の報せを流し母と義父を油断させたオレストが帰還し、ついに復讐が果たされる。

<主要キャスト・スタッフプロフィール>

【指揮】大野和士

東京藝術大学卒業後、バイエルン州立歌劇場でサヴァリッシュ、パタネー両氏に師事。ザグレブ・フィル音楽監督、バーデン州立歌劇場音楽総監督、モネ劇場音楽監督、トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、リヨン歌劇場首席指揮者、バルセロナ交響楽団音楽監督を歴任。現在、新国立劇場オペラ芸術監督(2018年～)及び東京都交響楽団音楽監督、ブリュッセル・フィルハーモニック音楽監督。これまでにボストン響、ロンドン響、ロンドン・フィル、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、フランクフルト放送響、パリ管、フランス放送フィル、スイス・ロマン管、イスラエル・フィルなど主要オーケストラへ客演、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤルオペラ、エクサン・プロヴァンス音楽祭など主要歌劇場や音楽祭で数々のオペラを指揮。新作初演にも意欲的で数多くの世界初演を成功に導く。日本芸術院賞、サントリー音楽賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。フランス芸術文化勲章オフィシエを受勲。新国立劇場では『魔笛』『トリスタンとイゾルデ』『紫苑物語』『トゥーランドット』『アルマゲドンの夢』『ワルキューレ』『カルメン』『スーパーエンジェル』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』『ペレアスとメリザンド』『ボリス・ゴドゥノフ』『ラ・ボエーム』『シモン・ボッカネグラ』『ウィリアム・テル』『ナターシャ』『ヴォツェック』を指揮している。26/27シーズンは『ピーター・グライムズ』『カヴァレリア・ルスティカーナ/道化師』を指揮する予定。

ONO Kazushi



【演出】ヨハネス・エラート

ウィーン・フォルクスオーパーとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のアカデミーでオーケストラ奏者として活躍後、演出家を志す。初期の演出作品に、2008年ゲッツ・フリードリヒ賞を受賞した『サンドリヨン』がある。ケルン歌劇場『オルフェオとエウリディーチェ』『アイダ』『マノン』『ファウスト』、ハンブルク州立歌劇場『椿姫』『利口な女狐の物語』、グラーツ歌劇場『ルル』『ドン・ジョヴァンニ』『エレクトラ』『ローエン格林』『死の都』(15年オーストリア最優秀作品受賞)を演出。フランクフルト歌劇場には09年『エンジェルズ・イン・アメリカ』でデビュー後定期的に登場し、『オテロ』『ジュリオ・チェーザレ』『オイリアンテ』『Der Mieter(借家人)』『ロジェ王』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』を演出。『フィガロの結婚』はザクセン州立歌劇場、サヴォンリンナ音楽祭で、『ホフマン物語』はザクセン州立歌劇場、フィンランド国立オペラ、パレンシアで上演された。最近ではローマ歌劇場『外套/青ひげ公の城』、フランクフルト歌劇場『アルチーナ』、バイエルン州立歌劇場『仮面舞踏会』『群盗』、オランダ国立オペラ『キューバのカルーソー』、ブレゲンツ音楽祭『ラインの黄金』などを演出している。24年ペーザロ・ロッシーニ・オペラフェスティバルで演出した『エルミオーネ』がイタリアで最も権威あるアッピアーティ賞を受賞。24/25シーズンベルリン州立歌劇場『Fin de Partie(エンドゲーム)』、ウィーン・フォルクスオーパー『チャールダーシュの女王』により国際ナル・オペラアワード優秀演出家賞にノミネート。新国立劇場初登場。

Johannes ERATH



【クリテムネストラ】藤村実穂子(メゾソプラノ)

ヨーロッパを拠点に国際的な活躍を続ける、日本を代表するメゾソプラノ歌手。東京藝術大学声楽科卒業、同大学大学院及びミュンヘン音楽大学大学院修了。主役級としては日本人で初めてバイロイト音楽祭にデビューし、フリッカ、クンドリー、ブランゲーネ、ワルトラウテ、エルダなどの主役で9シーズン連続出演。メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、パリ・シャトレ座、ベルリン・ドイツ・オペラ、ザクセン州立歌劇場、フィレンツェ歌劇場、ヴェローナ歌劇場、バルセロナ・リセウ大劇場、ザルツブルク祝祭大劇場等に出演のほか、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、バイエルン放送響、ロンドン響、ロンドン・フィル、パリ管、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、スイス・ロマン管等の世界的なオーケストラと共演している。2002年出光音楽賞、03年芸術選奨文部科学大臣新人賞、07年エクソンモービル音楽賞、13年サントリー音楽賞、14年紫綬褒章をそれぞれ受賞。24年文化功労者に選出。新国立劇場では『ラインの黄金』(01年)と『ワルキューレ』(02年、21年)フリッカ、『ドン・カルロ』エポリ公女(01年)、『神々の黄昏』ヴァルトラウテ(04年)、『イドメネオ』イダマンテ(06年)、『ウェルテル』シャルロット(19年)、『トリスタンとイゾルデ』ブランゲーネ(24年)に出演。

FUJIMURA Mihoko



【エレクトラ】アイル・アッソーニ(ソプラノ)**Aile ASSZONYI**

エストニアのドラマティックソプラノ。エストニア・フィルハーモニー室内合唱団でキャリアをスタートした後、『コジ・ファン・トゥッテ』デスピーナでオペラデビュー。現在は『タンホイザー』ヴェーヌスノエリーザベト、『さまよえるオランダ人』ゼンタ、『トリスタンとイゾルデ』イゾルデ、『アイーダ』タイトルロール、『トゥーランドット』タイトルロール、『エレクトラ』タイトルロールなどドラマティックなレパートリーへ移行。これまでにシエナ歌劇場、ウィーン・カンマーオーパー、ノーヴァヤ・オペラ、ベラルーシ国立歌劇場、ラトヴィア国立歌劇場、リトアニア国立歌劇場、グラーツ歌劇場、レーゲンスブルク歌劇場、ボン歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラなどへ出演。2023年にはフランクフルト歌劇場へ『エレクトラ』タイトルロールでデビューし、パイロイト音楽祭へは『神々の黄昏』グートルーネでデビュー。タリンのブリギッタ音楽祭では『トリスタンとイゾルデ』のイゾルデ、インスブルック・チロル州立劇場、エアフルト歌劇場『エレクトラ』に出演。2024/2025 シーズンは、ヴェルサイユ・オペラ、フランクフルト歌劇場で『ワルキューレ』ブリュンヒルデ、『ムツェンスク郡のマクベス夫人』、ザールラント州立劇場『トゥーランドット』タイトルロール、『ジークフリート』『神々の黄昏』ブリュンヒルデに出演。新国立劇場初登場。

**【クリソテミス】ヘドヴィグ・ハウゲルド(ソプラノ)****Hedvig HAUGERUD**

ノルウェー音楽アカデミーを卒業後、パリ国立高等音楽院、コペンハーゲンのオペラ・アカデミーで研鑽を積んだ。類まれな声色、力強さ、個性で、キャリアの初期段階から際立った存在感を示している。2023年パリ・オペラ座コンクール第2位、ミルヤム・ヘリン国際声楽コンクールプレス審査員賞、24年ラウリッツ・メルヒオール国際歌唱コンクール第1位。アンネ・ゾフィー・フォン・オッター、ポー・スコウフス、ソイレ・イソコスキ、ランディ・ステーネに師事。ダブルグ財団から研究助成金を授与され、スカーゲン・タレント・アワード 2019を受賞した。近年では、ベルゲン・フィルハーモニック・ユース・オーケストラでグリーグの歌曲を歌い、キリル・ベトレンコ指揮ベルゲン・フィルハーモニック管弦楽団『エレクトラ』第4の侍女に出演したほか、メス・メトロポール歌劇場で『サロメ』タイトルロールに出演。ノルウェー国立オペラ『エレクトラ』第5の侍女、トーマス・セナゴー指揮デンマーク王立オペラの『エレクトラ』などにも出演している。デンマーク王立歌劇場では『椿姫』アンニーナ、スウェーデンでは『仮面舞踏会』アメリアに出演。25年ブレゲンツ音楽祭のリサイタルも好評を博す。25/26 シーズンはサンタ・チェチーリア音楽院管弦楽団『ワルキューレ』オルトリンデ、メス歌劇場『エレクトラ』クリソテミスに出演。26/27 シーズンは新国立劇場『サロメ』タイトルロールに出演予定。

**【エギスト】工藤和真(テノール)****KUDO Kazuma**

岩手県出身。東京藝術大学卒業。同大学院修了。第1回かわさき新人声楽コンクール第1位、第84回日本音楽コンクール声楽部門第2位。第53回日伊声楽コンクール第1位、及び歌曲賞を受賞。第17回東京音楽コンクール声楽部門第2位(最高位)、及び聴衆賞を受賞。2024年5月にイタリアで開催された第3回ジュディッタ・パスタ国際声楽コンクールでは第3位を獲得。これまでに日生劇場『トスカ』カヴァラドッシ、『カプレーティとモンテッキ』テバルド、藤沢市民オペラ『ナブッコ』イズマエーレ、全国共同制作オペラ『ラ・ボエーム』ロドルフォなどで出演。新国立劇場では『ボリス・ゴドゥノフ』グリゴリー・オトレピエフ(偽ドミトリー)、鑑賞教室『ラ・ボエーム』ロドルフォ、鑑賞教室『トスカ』カヴァラドッシに出演。

**【オレスト】エギルス・シリンス(バス・バリトン)****Egils SILINS**

ラトヴィア出身。ラトヴィア国立歌劇場でデビュー後、ウィーン国立歌劇場にデビュー。ブレゲンツ音楽祭『デーモン』タイトルロールで称賛され、サヴォンリンナ・オペラ・フェスティバル、グラインドボーン音楽祭などの著名音楽祭に出演。ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤルオペラ、ベルリン・ドイツ・オペラ、ベルリン州立歌劇場、リセウ大劇場、テアトロ・レアル、チューリヒ歌劇場、バイエルン州立歌劇場などに定期的に登場。「ニーベルングの指環」ヴォータン/さすらい人、『パルジファル』クリングゾル、アムフォルタス、『トリスタンとイゾルデ』クルヴェナール、『サロメ』ヨハナーン、『エレクトラ』オレスト、『ボリス・ゴドゥノフ』タイトルロール、『オテロ』イアーゴ、『トスカ』スカルピアなどレパートリーは90に及ぶ。最近の出演に、パイロイト音楽祭『ラインの黄金』ヴォータン、ウィーン国立歌劇場『ローエングリン』テルラムント、英国ロイヤルオペラ『フィデリオ』ドン・フェルナンド、デンマーク王立歌劇場『トリスタンとイゾルデ』クルヴェナール、ラトヴィア国立歌劇場『椿姫』ジェルモン、ビルバオ・オペラ『サムソンとデリラ』大祭司、ヴィースバーデン五月音楽祭『エレクトラ』オレスト、ベルリン・ドイツ・オペラ『さまよえるオランダ人』タイトルロールなどがある。新国立劇場では2014年『パルジファル』アムフォルタス、23年『ホフマン物語』悪役四役、24年『トリスタンとイゾルデ』クルヴェナールに出演している。



【監視の女】森谷真理(ソプラノ)**MORIYA Mari**

武蔵野音楽大学・大学院、マネス音楽院卒業。『魔笛』夜の女王でメトロポリタン歌劇場デビュー。ウィーン・フォルクスオーパー、ライプツィヒ歌劇場などに出演するほか、リンツ州立劇場の専属歌手として『ラクメ』『マリア・ストゥアルダ』タイトルロール、ザクセン州立歌劇場『蝶々夫人』タイトルロールなど数多く出演。国内でも二期会『蝶々夫人』『サロメ』タイトルロール、びわ湖ホール『神々の黄昏』グートルレーネ、『ローエングリン』エルザ、『ニュルンベルクのマイスタージンガー』エファ、『フィガロの結婚』伯爵夫人、『ばらの騎士』元帥夫人などに出演。新国立劇場では『カルメン』フラスキータ、『ばらの騎士』マリアンネ、『ジュリオ・チェーザレ』クレオパトラ、『ナターシャ』ポップ歌手 A、高校生のためのオペラ鑑賞教室『蝶々夫人』タイトルロールに出演。



新国立劇場 2025/2026 シーズンオペラ

リヒャルト・シュトラウス

エレクトラ<新制作>

Elektra / Richard Strauss

全1幕<ドイツ語上演/日本語及び英語字幕付>

【公演日程】 2026年6月29日(月)19:00/7月2日(木)14:00/5日(日)14:00/8日(水)14:00/12日(日)14:00

【会場】新国立劇場 オペラパレス

【チケット料金】 S:29,700円・A:24,200円・B:17,600円・C:11,000円・D:7,700円・Z:1,650円

【前売開始】 2026年4月11日(土) 10:00~

※予定上演時間 約1時間45分(途中休憩なし)

指揮	大野和士	クリテムネストラ	藤村実穂子
Conductor	ONO Kazushi	Klytämnestra	FUJIMURA Mihoko
演出	ヨハネス・エラート	エレクトラ	アイル・アッソーニ
Production	Johannes ERATH	Elektra	Aile ASSZONYI
美術	ハイケ・シェーレ	クリソテミス	ヘドヴィグ・ハウゲルド
Set Design	Heike SCHEELE	Chrysothemis	Hedvig HAUGERUD
衣裳	ノエル・ブランパン	エギスト	工藤和真
Costume Design	Noëlle BLANCPAIN	Aegisth	KUDO Kazuma
照明	オラフ・フリーゼ	オレスト	エギルス・シリンス
Lighting Design	Olaf FREESE	Orest	Egils SILINS
映像	ビビ・アベル	オレストの養育者	斉木健詞
Video Design	Bibi ABEL	Der Pfleger des Orest	SAIKI Kenji
		クリテムネストラの腹心の侍女	中村真紀
		Die Vertraute	NAKAMURA Maki
		クリテムネストラの裳裾持ちの女	杉山由紀
		Die Schleppträgerin	SUGIYAMA Yuki
		若い下僕	糸賀修平
		Ein junger Diener	ITOGA Shuhei
		年老いた下僕	河野鉄平
		Ein alter Diener	KONO Teppei
		監視の女	森谷真理
		Die Aufseherin	MORIYA Mari
		第1の下女	金子美香
		Erste Magd	KANEKO Mika
		第2の下女	谷口睦美
		Zweite Magd	TANIGUCHI Mutsumi
		第3の下女	清水華澄
		Dritte Magd	SHIMIZU Kasumi
		第4の下女	高橋絵理
		Vierte Magd	TAKAHASHI Eri
		第5の下女	田崎尚美
		Fünfte Magd	TASAKI Naomi
合唱指揮	富平恭平		
Chorus Master	TOMIHIRA Kyohei		
合唱	新国立劇場合唱団		
Chorus	New National Theatre Chorus		
管弦楽	東京フィルハーモニー交響楽団		
Orchestra	Tokyo Philharmonic Orchestra		
芸術監督	大野和士		
Artistic Director	ONO Kazushi		

公演情報 WEB サイト <https://www.nntt.jac.go.jp/opera/elektra/>

【チケットのご予約・お問い合わせ】 新国立劇場ボックスオフィス TEL:03-5352-9999 (10:00~18:00)

新国立劇場Webボックスオフィス <https://nntt.pia.jp/>